（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　小椋　彩

本論文で取り上げられたロシアの作家アレクセイ・レーミゾフ（1877–1957）は，ロシア革命以前に発表された，象徴主義の技法を散文に取り入れた一連の写実主義的小説およびフォークロア的作品によって，すでに一定の文壇的地位を獲得していた。しかし 1922 年の亡命後も活発な創作活動を続けていたにもかかわらず，旧ソ連時代にはその成果は過小評価され，細々とロシア国外で研究が続けられるにとどまっていた。現在この時期の作品の復権・再評価・出版が急速に進む状況下で書かれた本論文において，小椋氏は，ロシア革命以前と亡命以後のレーミゾフの作品を統一的に理解するための一貫した視点を，「書く人」という魅力的なイメージに収斂させて提出しようとした。

序章において現在までの研究状況が簡潔的確に示された後，第 1 章において，初期の代表作であるフォークロア的作品群が取り上げられる。小椋氏はこの作品が受けた「剽窃疑惑」に対する作者の弁明の分析から出発して，レーミゾフの「作家」ではなく「再話者」を志向する矛盾した「非ロマン主義的」「非創造者的」「個性」に注目する。続く第 2 章ではやはり初期の，ゴーゴリ，ドストエフスキイの系譜に属する写実的な小説が取り上げられる。この系譜の小説に現れる「筆耕」のイメージ，この作品に現れる発禁処分を受けたため「筆写」を通じて密かに読まれていたプーシキンの詩作品の挿話に特に注目することによって，作品の背景に一人の作者ではなく民衆全員に物語が共有されていた時代の豊かな民衆的想像力があることが明らかにされる。

蒐集され一見無秩序に配列された古文書の引用からなる亡命期初期の特異な作品『書かれたロシア』を分析した第 3 章では，この作品が「集団的な記憶の書」であると同時に「民衆の神話の再創造」のモデルでもあるとされる。亡命期後期に書かれた，中世の写字生を主人公とする連作集『写字生――カラスの羽ペン』を主に論じた第 4 章では，初期から一貫して描かれてきた「書く人」という形象がここでは能書家でもあった作者自身と重ね合わせられ，印刷に対する不信，文字そのものへの執着，「書く」という行為の重視がそこに読み取れるとされる。

審査では先行研究が少なく，難解をもって鳴るレーミゾフのテクストを粘り強く読み解き，「近代以降の個人主義を否定する」「主人公の個人的運命を語るような伝統的な小説に代わる新たな形式」を終生模索したとする作家像を説得的に提示し得た点が何よりも高く評価された。「民衆」等の用語のやや安易な使用，やや緊密さを欠いた構成，誤解の散見するテクスト解釈等々の欠点も指摘されたものの，本論文がもたらした功績は審査委員会が一致して認めるところであった。

以上により，本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位授与に値するものとの結論に達した。